

大蛇退治（丹南町）

すみきった秋空に、池尻（じり）神社のお祭りののぼりが立ち、着飾った村人たちがお宮の森へと集って来ます。道々お宮で奉納（ほうのう）される狂言（きょうげん）について、おじいさんから聞いたあらすじを、勇次くんはつぎのように話してくれました。

昔、この村では、毎年お祭りに、十五才未満の少女を人身御供（ひとみごくう）に出さねばなりませんでした。

ある年のことです。老夫婦が一人娘を人身御供に出さねばならぬので、悲しんでいるところへ、妻えらびに西国へ回って来た青年武士が、このわけを聞き、同情して、このお宮の神木桜の下にこもることにしました。

ある日、一心に神さまにお祈りしてつかれ、うとうとしていると、夢（ゆめ）の中に、突然池尻大明神さまが現われ、宝剣一ふりを「智仁（ちじん）備えし勇者に与える」と言って、消えてしまわれました。

青年は起き上り、これこそ「神の恵（めぐみ）」と言って、樹下に置かれた宝剣をおしいただきました。

お祭りの当日になって、人身御供の行事もすみ、村人も帰った後でした。ふしぎにも草木が動揺して星一つない暗夜になりました。参籠（さんろう）の青年は目を光らし、あたりを警戒（けいかい）していました。

夜半になって雨も降って来たころでした。目をぎらぎらさせながら、岩に火炎を放ち、空に炎を降らしながら、こちらに近づいてくる異様なものがあります。

青年は、「池尻大明神」と心に念じ、剣をぬいて待っていました。雨もはげしくなり、あやしげなものが、急に青年におそいかかって来ました。青年は飛びちがい、かいくぐり、斬（き）りつけました。剣におそれて、岩にのぼろうとするのを、引きおろし、刺し通し退治いたしました。その瞬間空は明るくなり、そこに十メートル余りの大蛇が死んでいました。

その後、村は繁栄（はんえい）し、青年は老夫婦の一人娘をめとり、村に住みついて、子孫（そん）が栄えたということです。

